

甲南大学 総合研究所報

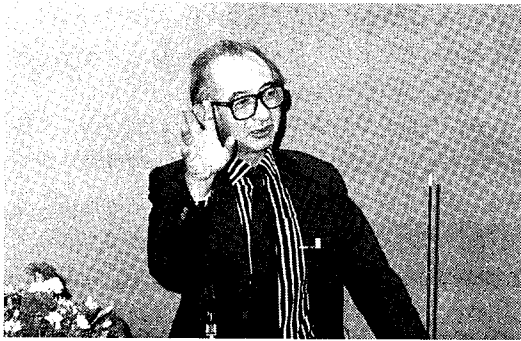
甲南大学総合研究所 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

第8回公開講演会 「生命科学の進歩をたどる」

—— “おたまじゃくし” の先生からバイオまで ——

講師 国立基礎生物学研究所所長 岡田 節人 氏

総合研究所は1988年11月4日午後3時から10号館1階1012号講義室で、岡田節人氏を招き、公開講演会を開いた。同氏は旧制甲南高等学校第22回の卒業生であり、京都大学を卒業し、京都大学教授を経て、現在、基礎生物学研究所所長、国際発生生物学学会会長など多くの要職を歴任されている。1961年日本動物学会賞、1988年米国のアルコン科学賞などを受賞され、また、研究活動の傍ら、多くの学術書や啓蒙書を著されるなど、生命現象の探求に、後進の啓発に、活躍されている。以下に、理学部道之前允直助教授にまとめていただいた講演要旨を掲載する。



講演要旨

「私は、生物学を研究する科学者の一人であります。本来、科学者は物事を客観視する上で自分を語ってはならないのですが、本日は、母校で講演するという特殊性もあって、私事を中心に話をさせて頂きたい」と前置きされ、自分史を主軸に、興味深いスライドを交えて、“現在の我国における生命科学の現状、我が国の自然科学分野における位置”などについて分かりやすく解説された。

ヨーロッパなどでは、18世紀頃より生物学が始

まった。初期の頃は、生命の多様性に対する興味(たとえば、蝶の蒐集などによって色々な種類のものが存在することを知る)に始まり、おたまじゃくしは蛙であって魚ではない、海に泳ぐクジラは水中に生活するが魚の仲間ではない、陸上の動物と同じである、その共通点はどこにあるか、などと分析的に物事をとらえる方向に発展してゆく。しかし、我が国では、多様性を調べ、分析的に考える方向には進まず、“この草は腹に効く薬、これは頭痛に効く”のように、何々に役立つ、何々に効くという本草学にみられるような思考過程が優先されてきた。「この二つの体系から、私は、日本人とはなにか本質的に、遺伝的に自然に対する好奇心を欠いているのではないかと思います」。

我が国では、生命の多様性やその普遍性を研究する動物学や植物学などに代表される生物学は、役に立たない垂流の学問であり、旧帝国大学設立当時には第二学科として扱われ、ものの役に立たないものは学問ではないとする考えが主であった。

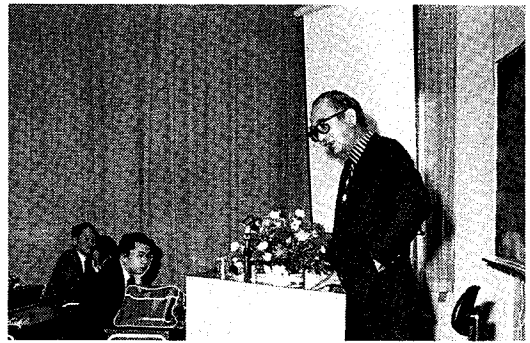
このような風潮の中であって、旧制の甲南高等学

校は自由闊達な学風で、よくできる者はできる者なりに、また、できない者はそれなりに活躍の場があり、自然科学的な物の考え方や芸術を育むのに良い環境であった。同校在学中に、高谷博、渡辺得之助ら良き師を得て、「チューリップとサクラは違うではないか、多様性があるではないか、しかし、それ以上に大事なことは、どちらも花が咲くではないか、この花が咲くとはどういうことかを習ったのであります」。つまり、生命の多様性とその中に共通する普遍性に興味をもつようになり、自然科学をする心を学び、さらに、蛙の卵にいろいろな手術をほどこして（糸で卵を二つにくる）詳しく調べる、つまり、実験的手法を用いて生命体を詳しく調べる方法が20世紀のはじめからあることを知った。「生物（いきもの）は一生まれたままの形ですごす物はないのです。すべて形を変えて大きく成長します。つまり、「おたまじゃくしは蛙の子」これが私の一生の命題となりました」。よって、「私の科学はこの地（甲南大学）より始まったのであります」。

1957年英国のC.H. Waddington 教授のもとに留学し、ここで自然科学の位置づけや自然科学をする心を学んだ。人が自然のからくりをとく、つまり、知性の行為であって芸術と何ら変らない。これが文明であるとする考え方である。事実、この考え方に従って、同教授の世界的に有名な発生概念を示す学説“The epigenetic landscape”が生まれている。現在、英国の自然科学は文明に力を注ぎ、技術開発を後回しにしたことから実生活よりしだいに離れたものになってしまった。これとは逆に、我が国では技術に重点を置いてきた故に英国の反対の極に位置するようになってしまった。

1970年以後、生物学は生命の多様性を調べることから急速に普遍性を求めるようになり、その基本物質DNAを発見し、時代を大きくかえた。これによって、バクテリアからヒトまで共通であることが明らかになった。しかも、共通点が物質（DNA）であることから、ヒトの常として、その物質を操作する、つまり、遺伝子を操作し、生物をデザインすることをはじめた。これに成功した例は巨大マウス（本来の約1.7倍）の作製である。

その後、応用研究に興味が集申し、種々な技術的革新が成し遂げられ、特殊な技術を持たない素人でも比較的簡単に生物をデザインすることが出来るようになってきた。蛙の卵を非常に練達の技をもって二つにくり切っていたことがいまや各種の機器を



用いて素人にも出来るように、また、ヒツジやウシの卵でも出来るよう応用面の技術革新がなされた。現在、これをハイテクと称してもはやしているが、その底にある原理的な面や理論的な面においては何ら変わらず、80年前にイモリの卵を糸で二つにくり分けて二匹の幼生を誕生させたのと基本的には同じである。また、なぜ二匹になり得るのかという理論面の追求もいまなお続けられている。このような80年前から営々と続けられてきた基礎を着実に踏み固めて行く基礎科学の方法こそが、種々な物事を解析し、飛躍的な進歩を促す原動力となるものであり、非常に重要である。「いつまでも同じことばかりをやって、といわれる変わりのない生物学をやっていることが現在のバイオという応用に行き着く必然性を、私は、分かっていたきたい。でなければ我が国における基礎科学とは何か分からなくなるのであります」。

我が国には科学技術という奇妙な言葉がある。科学と技術でもなく科学・技術でもない独特の言葉であり、その意味するところは本来“科学あればこそその技術”である。しかし、いくらこれを唱えても今や今日の我が国では通用しない。よって、日本流の科学技術という考え方に立って、科学技術が進むと金が集まり、研究者も増えてくる、すると本来の科学も分かってくる、と複合的にとらえられて行けば純粋科学を解くために有利に働くものと思われる。しかし、今日の我が国では残念なことに科学技術とは何か、その内容を検討することを忘れ、純粋科学的な物の考え方が遺伝的に欠落していることをも忘れてしまっている。もう一度科学技術の内容を再検討し、純粋科学とは何か、また、その原点はなにかを考えなおす必要があるのではないだろうか。

昭和63年度研究チームの中間報告

平生鈺三郎とその時代

(研究番号18)

研究チーム 三島 康雄 (営)
高阪 薫 (文)
安西 敏三 (法)
杉原 四郎 (名誉教授)
津田 内匠 (一橋大学経済研究所)
長谷川雄一 (八千代国際大学政経学部)
柴 孝夫 (京都産業大学経営学部)
岡崎 哲二 (東京大学社会科学研究所)

平生研究も第3段階にはいっているわけであるが、各研究員の中間報告要旨を以下に掲げる。尚、東京在住の研究員については次号で報告できると思う。(2月18日に東京にて研究会を催す)。

「平生鈺三郎をめぐる人々」 (杉原 四郎)

平生鈺三郎は単に海上火災保険業界のリーダーに止まらず、ある時期から関西財界全体のリーダーの一人となり、さらにある時期から日本全体の代表的財界人の一人になる。それはもとより平生の能力と努力の結果であるが、同時に、その理由として、(1)海上火災保険という業界で日本経済を広い視野でとらえる経験を積んだこと、(2)東京高商出身でその同窓会(如水会)を通じて財界や学界にわたる人脈を活用したこと、(3)阪神間の住吉に住んで近隣の財界人と親交を結びえたこと、(4)ロータリークラブを通じて広く各界の人物とのつながりを持ったことなどが考えられる。こうした種々の人的交流の中で、とくに平生にとって重要だった幾人かの人物(久原寿之助、武藤山治、上田貞次郎など)との関係を、平生日記を通じて追求しているところである。

「大正期における平生鈺三郎の生活と意識」

(三島 康雄)

私の研究は、大正期における東京海上火災保険株式会社の専門経営者としての平生が、どのような経営者としての生活をしてきたか、またどのような財界団体に所属し、どのような交友関係を持ち、どのようなルートで情報を得ていたかを研究することを目的としている。経済史では生活史という分野がすでに確立しているが、経営史の分野で生活史の分野を確立するための新しい試みである。また三菱財閥の有力傍系会社である東京海上の専務であった平生

が、三菱財閥ならびにそのオーナーである岩崎家に対してどのような考えを持っていたか、さらに当時の財界や社会の諸問題に対してどのような思想を抱いていたかを追求することも、目的としている。

「平生鈺三郎と二葉亭四迷」 (高阪 薫)

平生と二葉亭の関係を研究している。両者は東京外国語学校露語科で同級生(明14～明19)であったこと。そこに入学するまでの両者は貧富の家庭環境や育ちに対照的であったこと。学生時代には自由民権運動の激動期に机を並べ、寄宿舎生活を送ったこと。政治意識が強く露文学に傾倒した二葉亭に対し、平生は露語科の秀才であったが学生生活はエンジョイしたこと。両者にとって最大の問題は学制改革で東京外語が廃止され将来の保証がなくなったこと。このことは二人の生き方の分岐点となり、平生は東京外語を吸収した東京商業学校に進級し実業界に歩み、二葉亭は退学し、この体験をモチーフに『浮雲』を書いて文壇にデビューしたこと。以上を諸資料を通じていままでに究明してきた。今後もその線上に立って、両者が学んだ東京外語の教育や両者に影響を与えた東京商業学校長矢野二郎等のことを調べ、人生に方向を与えた青春時代の生活や思想を解明し、その後、壮年期には両者ともに極東問題に関心を持つが、両者の関心の度合と活躍の状況や思想の相違を調べていく。また、平生の文学観も二葉亭に対する発言からも考えてみたい。

「平生鈺三郎と各務謙吉

—海運業経営者としての比較—

(柴 孝夫)

平生鈺三郎と各務謙吉は、東京海上火災の関西地区担当専務と関東地区担当専務として互いに批判しつつも協力関係を維持した友人同志であった。しかし昭和期に入ると、平生は川崎造船所の再建に努力し、昭和8年から同社の社長に就任し、同時にその子会社である川崎汽船の実質的な経営責任者となり、海運業経営者としての役割をはたした。また各務も三菱合資本社理事を経て、昭和4年に日本郵船の社長に就任し、奇しくもこの二人は海運業の経営者として対立することになった。今年度の研究では、平生と各務の海運業経営者としての相違点と異質点を比較研究することを主たる目的としている。

「平生夙三郎における詩と真実」 (安西 敏三)

目下、平生の『自叙伝』を、校注を施して資料として『甲南法学』に公表している。現在までのところ草稿の約半分を掲載した。残りも出来るだけ早期に公表したい。ただ平生関係者の証言によると現存している自伝草稿は中途までで、さらに倍の草稿があるという。この点についても調査したい。

女性と人生

(研究番号19)

研究チーム 松尾 恒子 (文) 宮城 公子 (文)
斎藤 朋子 (文) 上村くにこ (文)
石川・フランケ・サスキア (文)
上水流伸子 (体) 松尾 洋子 (体非)
名賀三希子 (体非)
池田 啓子 (イリノイ大学)

本研究チームの目的は、女性教員が各自の研究を進めていく中で、抽出されてくる女性に関するテーマを持ち寄り、検討しあうことによって、それぞれの研究の奥行を深めることであった。

4月22日の研究員顔合せから始まって、その後6回にわたって持つことができた研究会によって、上記の目的の基礎は固まったのではないかと自負している。

まず5月16日、池田啓子の『日常性のフェミニズム』では、ポストモダンの思想の流れの中で、男女の役割分担のパラダイムが書きなおされつつあること、その変わり方の日米比較、アメリカの最新フェミニストの学問的動向などが論ぜられた。

6月27日のサスキア・石川・フランケの『女性文学とその条件』では、日本ではまだ全然知られていないドイツのフェミニスト作家・芸術家たちについて、興味深い紹介がなされた。

イリノイ大学教授・千栄子・ムルハーンによって7月18日に発表された『アメリカ大衆文化論の動向—キャリア・ウーマンの理想像を中心に—』は、文学性がないとさげすまれている、ハーレクインromanなどの女性向きの大衆小説を、社会学的視点でみなおすとどうなるかという、ユニークな研究であった。小説の中のヒロインとヒーローに貼りつけられる記号とその合成パターン分析に議論が集中した。

11月17日には上村くにこが7月に出版した『性の

崩壊』の合評会が行なわれた。「男らしさ」「女らしさ」というワクをはずすことによって、新しい文化・学問の可能性が開けるとする楽観論と、男女の違いは歴史を超えて残るであろうという否定論が別れて、活発な議論が沸いた。

12月19日の斎藤朋子による『中世の女性— wife of Bath の場合』は、チョーサーの『カンタベリー物語』の有名な登場人物、バースの女房を見なおそうという提案であった。「男を減ばす恐ろしい女」という定説をくつがえして、むしろ「5回も結婚しながら一度も真の結婚の幸せを味わったことのない、心に悲しみを秘めた女性」であるという見方には、賛否こもごもの反応があった。

研究会には常時、学外からの女性の参加を見ることができ、様々な立場から熱心な発言があった。しかしあまりにも立場や背景が異なるために、議論の糸がつかめなくて困惑する場面が時々あった。これは女性に関する議論が今までロゴスの板の上のせられることがあまりにも少なかったためだと思われる。この研究会がひきつづき男女関係を言語化するための、鍛練の場になることを望むものである。さらにこの研究会への男性の参加が0人~1人、多いときでも2人に限られていたことは、本研究会の趣旨にもとることであるので、広く男性に呼びかけて議論に参加してもらえよう、呼びかけてゆくことも、残された課題であると思われる。

近代イギリスの比較文化史的研究

(研究番号20)

研究チーム 渡邊 孔二 (文) 田中 秀夫 (経)
村岡 健次 (文) 松村 昌家 (文)
杉原 四郎 (名誉教授)
安西 敏三 (法) 高橋 哲雄 (経)
田中 真晴 (経) 中島 俊郎 (文)

私たちのチームは1988年4月25日に、ペンシルヴェニア州立大学教授スタンリー・ワイントラウブ氏の公開講演会を主催することによって、研究会のスタートを切った。演題は「アメリカ伝記作者の見たヴィクトリア女王」。およそ90分にわたる講演の中で、氏はいかなる「親密さ」をもってみずからの『ヴィクトリア女王伝』(1987)を書いたかを語りながら、女王の知られざる面の数々を披露された。氏の著書はまもなく邦訳で刊行されるとのことであ

る。

次に第1回目から最近に至るまでの研究例会の日付、発表者および題目を掲げ、各研究発表の要旨を紹介する。

5月17日 杉原四郎「明治英学の滲透」。「英学」には(イ)英語を通して学ぶ西欧の学問と、(ロ)イギリスの言語、歴史、思想に関する学問の二義がある。明治10年以降は(ロ)の傾向が強くなり、中でもイギリス自由主義の社会思想や経済学が盛んに導入された。まもなく英学は独逸学に座を譲ったかの感があったが、依然として英学の影響と滲透は続く。そうした流れに貢献したのが、大正期に京大と東大での講義を通じて、また多くの著作によってスミス、ベンサム、ミルの思想を紹介した河上肇と河合榮治郎であった。

6月19日 安西敏三「明治期における学問と知識人」。明治期にイギリス思想の導入に最も先駆的役割を果たしたのは、福沢諭吉であった。福沢は学者私立論を唱え、独立自尊をモットーとして在野を貫いたが、その精神はイギリス流リベラリズムへの深い理解なくしては考えられない。ブラックストーン『英法注解』、バッケル『英国文明史』、ミル『自由論』、スペンサー『第一原理』、バジョット『英国憲法論』等の古典的作品のみならず、同時代の英米の教科書が、彼の知識源となったのである。

7月21日 田中秀夫「スコットランド啓蒙研究の現在」。1707年のイングランドとの合邦以来、スコットランドの啓蒙知識人たちは、近代社会の原理究明に稀に見る自己投入を行った。ヒュームの『政治論集』、ファーガソンの『市民社会史論』、アダム・スミスの『道徳感情論』、『国富論』などはその精華である。しかし近代化は、伝統との衝突を免れない。マクファースンの『オシアン』が引き起こした論争の実態を明らかにすることによって、この衝突をいまみることが当面の課題である。

10月11日 渡邊孔二「漱石・スウィフト・スコット」。漱石の有名な「スウィフトと厭世文学」については、従来多くの論評がなされてきたが、実は最も素朴でしかも興味深い読み方、つまり、この評論自体に使われている語句に寄り添って読む読み方が等閑視されている。そこでそういった観点からこの評論を読み直してみた結果、この評論の背景にウォルター・スコットのスウィフト論があることが判明した。合わせて漱石らしさに関する指摘も可能になった。

12月15日 高橋哲雄「ミステリーの読者層——世紀末から兩大戦間期まで——」。19世紀末に成立した探偵小説の読者層は、兩大戦間に「黄金時代」を迎える。その過程を、イギリスを中心に、適宜日本や韓国、あるいはアメリカの状況などと比較しながら検討し、どういう人たちが探偵小説を「読む人」であったか、またどういう条件—その中では貸本屋や図書館、本の価格の引き下げといった「読ませる人」の側の要因が重要である—がミステリーの読者層の構成や拡大に影響を及ぼしたかを探る。

1989年1月26日 田中真晴「A・マーシャルとその時代」。マーシャルを経済学史的に理解するには、J. S. ミルから出発して、時代と理論の変化に対応してどのように経済学を作りかえたかを省み、ケインズ登場の準備がどのようになされたかを考える必要がある。問題は時論(政策論)、理論体系、思想の3つの層において考えねばならないが、まず1875年から1917年の間の9篇の時事経済評論を検討していえることは、マーシャルが基本的に自由主義を貫きながらも、政府の経済的役割が都市行政、景気変動その他において増大し、とくに累進税率の支持において、ミルと異なることである。

なお第8回例会として2月28日中島俊郎「レズリー・スティヴンの批評」が予定されている。

(松村 昌家)

ヨーロッパ、アジアにおける

「日本的経営」

— YKKの海外進出工場 —

(研究番号21)

研究チーム 熊沢 誠(経) 高橋 哲雄(経)
滝沢 秀樹(経)

1。

日本の企業は、その労務管理や労使関係において際立った独自性をもっている。ではその〈日本的経営〉は、外国人従業員にたいしてどのように適用され、日本とはことなる制度や文化にみあってどのように適応しているだろうか。1987年現在、すでに上場企業の48%が海外に進出し、その現地雇用者は150万人以上に及ぶ。そんな今、上述の適用・適応関係を虚心に把握することは、社会科学の主要課題の一つであるばかりか、広く〈国際化時代の日本〉のありようを考える絶好の手がかりとなるだろう—

私たちのグループのテーマ設定はこうした関心に導かれている。

2。

私たちが選んだ研究方法は、二、三の特定企業のさまざまな国の子会社や合併企業を訪れ、工場を見学するとともに従業員への処遇や労使関係について25項目ほどくわしく質問することであった。特定の国の諸企業を訪れるよりも、そのほうが適用・適応関係の制度や文化による変容をみるにふさわしいからだ。

そのうえで次の各社を調査対象に選び、訪問・見学の許可をお願いした。

A社 世界市場で52%のシェアを占める各種ファスナーのトップメーカー。製造業としては海外進出にきわめて先駆的（1959年から）であり、いま40ヶ国に104の子会社、54の製造工場を擁する。

B社 日本有数の総合家電メーカー。この企業も海外生産に積極的であり、いま28ヶ国に77の関連会社（うち44は工場）をもつ。

C社 京都本社の自動車用蓄電池のトップメーカー。アジア5ヶ国とアメリカの合弁会社で海外生産を展開する。

訪問国としては①先進国、②アジアNIEs、③アセアン諸国……という区別を立て、さしあたりこれはなおパイロットサーベイなので訪問国を絞ってグループメンバーの研究史などを考慮して、①からイギリスとドイツ、②から韓国、③からタイ国を選んだ。それにしても費用とスケジュールの点から、海外工場への訪問者がしばしば特定者（主として主査）に限られたことは残念である。

3。

研究の経過をかんとんに紹介する。

1988年4月 A者主力工場（黒部市）見学と、海外事業担当者、海外駐在経験者からのききとり、資料収集（グループメンバー参加3名）／A社東京本社で韓国駐在経験者からのききとり（参加1名）

同年5月 C社京都工場見学と海外事業担当者からのききとり、資料収集（参加1名）／A社東京本社で海外駐在経験者（ヨーロッパ3国とアメリカ）からのききとり（参加2名）

同年6月 B社北条工場見学と海外戦略に関するききとり、資料収集（参加2名）／A社韓国工場訪問、見学とききとり（参加2名）

同年8～9月 B社住道工場見学と海外戦略についてのききとり（参加3名）／A社とB社のドイツ

とイギリス計4工場を訪れ見学と質疑、資料収集（参加1名または2名）

同年12月 A社、B社、C社のタイ工場を訪れ見学と質疑、資料収集（参加1名）

以上の調査の結果として各自のノート、企業の書式回答、関連資料、27本のカセットテープがある。

研究の第2年目は、それらの整理、分析、文章化にあてられる。この「パイロット調査」で知りえた内容については本報告に譲りたい。

（文責 主査・熊沢 誠）

わが国の金融制度改革

（研究番号22）

研究チーム 中島 将隆（経） 鶴身 潔（営）
吉沢 英成（経） 二上季代司（経非）
稲田 義久（神戸学院大学経済学部）

レギュラー・メンバーに吉沢が新たに参加し、また、時にはゲスト・スピーカーも加わって、月に1回、賑やかな研究会が続いている。「わが国の金融制度改革」という点に共通の関心があっても、参加者の視点はそれぞれ大きく異なり、その上、かなりの論客が集まっているから賑やかになるのも当然のことだ。賑やかな議論をたたかわせていくうちに、これまで思いつきもしなかった論点を教えられたり、あるいは新鮮な問題の切り口に接することも多く、総合研究とはなかなか味のあるものと感想を述べあうこともある。研究会も回を重ねるうちに当面の関心が金融のグローバル化に向けられるようになった。以下は、研究メンバーの感想である。

ふたつのコクサイ（中島）

金融自由化は“ふたつのコクサイ”によって推進されるといわれてきた。国債の増発と金融国際化によってである。だが、この一般の考え方に私はひどく反発してきた。根本原因がふたつというのはすっきりしないし、また、国際化は日本経済にとって外生的要因である。外生的要因は内生的要因の優位において自己を貫徹するから、金融国際化は金融自由化にとって副次的要因にすぎない。このように考えてきたのである。ところが、円・ドル委員会以後の現実の展開をみると、果たしてそうなのか、と考えさせられることが多い。どうやら、独断と偏見だけで通りすぎることができないようで、内心、恐怖で一杯である。

国際金融と国際関係（吉沢）

1987年10月のいわゆる“ブラック・マンデー”は1929年のような大事には至らなかった。また、ブラジル、メキシコなどの累積債務額は空前の規模に達し、かつ、返済の見通しもほとんどたっていない。にもかかわらず、国際通貨や国際金融は制度上、大した混乱もなく推移している。アメリカ合衆国の、いわゆる“双子の赤字”も大規模ながら、たんにドルの価値を上げ下げする要因となるだけでドル不信の騒動にはつながらない。これら国際金融のきわどい綱渡りに、わが国の果たす役割は極めて大きい。たとえば“ブラック・マンデー”。日本の金融筋がアメリカから資金を引き上げるような措置をけっしてとらないこと、できるかぎり資金をアメリカへ投じ、株価、債券を買い支えることなどなど、こうしたことをすばやく協議して実行に移したのである。日本は国際金融上、カギを握る立場にある。国際関係上、否応もなく、カギを握られている。

金融システムの安定性（鶴身）

わが国の金融自由化が総仕上げの段階に入っている中で、業務、制度面の規制のあり方についても見直され、基本的な方向が示されつつある。ところが金融自由化の実現が従来型の競争制限的な規制システムからの解放であるのに対して、金融機関経営の健全性の維持や金融システムの安定性確保を図っていくための新たな方策が規制システムの再編という形で求められる傾向にある。金融自由化の進展は金

融機関の活動領域と自由度を増加させる一方で、金融機関の危険負担を高める余地を拡大させる結果ともなっており、金融システムの安定性を脅かすものとなっているのかどうか考察している。

金融のグローバリゼーション（稲田）

1988年においては、金融のグローバリゼーションをメインテーマとして研究を行った。金融のグローバリゼーションは他面的な側面を持つ。稲田はその影の側面にスポットをあてた。例えば、発展途上国の累積債務問題を取り扱った。発展途上国の累積債務問題は借りる国、貸す国の両方に問題があるが、それら両者の問題を明らかにするとともに、累積債務問題解決のために開発された数量モデル及びその政策シミュレーション結果のインプリケーションの検討を行った。今後は直接投資の問題を取り扱う予定である。

金制調の問題点（二上）

日本の金融制度改革論議をとりあげるにあたって、その背景となっている金融環境の変化の実態調査を行った。金融制度調査会の報告書『専門金融機関制度のあり方について』（1987年12月）は第1編の前半10章にわたって、種々な論点をあげて業態規制の緩和、撤廃が必然かつ必要であることを力説しているが、とくにこのうち本年は、市場の国際化、内外交流の進展という現実をとりあげ、金融・証券市場の国際化に関する内外の文献収集と整理を行いつつ、国際化の実態分析を行った。

1989年度研究課題および研究チーム

〈研究所委員会企画のもの〉

アメリカの社会と文化 —— 移民社会ハワイの構造的分析 ——

(研究番号23)

●研究内容の概要

本研究は、アメリカの社会的、文化的特質を探究するため、一定地域（ハワイ州）をケースとしてとりあげその社会的および文化的構造を、経済学、社会学、政治学、文学等の視点からトータルに分析するものである。地域研究的を単なる表面的分析にとどめず、より専門的な、そしてより総合化された分析をおこなうことによって、いままでに一般化されてきた「アメリカ文化」の既成概念に新たな仮説をつけ加え、実証することがこの研究の目的である。

●研究の特色

アメリカ社会が「アメリカ」という一語で総括できないほどの多様性をもつと考えられるとき、ハワイ原住民やアジア各国からの移民に代表されるエスニック・グループの存在がみられるハワイ州は、アメリカそのも

のであるとも考えられる。しかしながら、従来の研究では個別エスニック・グループを縦断的に分析することが多かった。しかし本研究は、一定地域について各専門分野から社会構造を横断的に分析することを試みるものである。

●研究の必要性

上述のように、多様な専門研究分野からこのような研究は、まさに総合研究とするのにふさわしく、このような学際的研究の推進だけでなく、ハワイ大学イースト・ウエストセンターとの研究交流をはかることがおこなわれ、その研究成果は、総合科目や公開講座として、学内外の人々との共有も図られている。

●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

- 森田 三郎（文）ハワイにおけるエスニスティ研究
- 久武 哲也（文）ハワイ州の地理的構造分析
- 杉村 芳美（経）ハワイ州の経済的構造分析
- 河田 潤一（法）ハワイ州の政治意識研究
- 丸田 隆（法）ハワイの原始法とコモン・ロー

〈公募によるもの〉

人間の深層心理と社会の深層構造（深層心理研究）

（研究番号24）

●研究内容の概要

人生観・世界観の喪失の下に、現代に生きる人々は人間疎外を経験している。それは単に人生の目的や社会の進行方向の喪失を示すのみならず、人間存在自体が危機状況にあるといえよう。その主要な原因は、文化・学問における実体化された合理主義的思考方法（例えば、文化・学問のフェティシズム）によるといえる。

そこで、本研究の目的は、そのような硬化した知的枠組みを水平・垂直軸から捉え直し、再構築することを意図する。つまり、一方で、文学（象徴主義・ロマンティズムの再評価）、哲学（合理主義批判）、心理学（呪物崇拜批判）、医学（健康至上主義批判）、経済学（金銭至上主義批判）等の諸分野が交流をもつとともに、他方、それぞれの分野における深層構造を多層的に明らかにし、合理主義、非合理主義の枠を越えた知のパラダイム転換を行なう。

●研究の特色

深層心理の問題を、単に「人間の深層心理」のみに留まらず、「社会の深層構造」にまでパースペクティブを拡げて考察する。そのため、前者については、文学、哲学、心理学、精神医学の諸見解を検討し、後者については、人間が置かれてある「場」としての社会を、経済発達、社会病理、大衆心理、環境医学の諸問題を通じて吟味することによって、その深層構造を明らかにする。そのような個と全体の深層構造を分析することが、本研究の特色である。

●研究の必要性

人間の深層心理と社会の深層構造を総合研究することによって、新しい学問の再構築と人間疎外の解消がなされよう。現代においては、このような総合研究が強く要請されている。

●研究チームと研究分担

- 佐藤 明雄（文）心身論新考
- 谷本 泰三（文）アメリカ文学と非合理的世界
- 織田 尚生（文）人間における深層心理
- 寺島 樵一（文）文学表現における象徴性
- 谷口 文章（文）新・心身関係論
- 森 茂起（文）心理学における現実と非現実
- 永友 育雄（経）経済学における非合理的要因
- 藤本 建夫（経）都市化の大衆心理

中川 米造 (滋賀医大) 医療のミトロジー
氏原 寛 (大阪市大) 意識の場
小出龍太郎 (浪速短大) モーパッサン文学の深層構造
瀬尾 博 (精神科医) 精神医学における諸問題
杉林 稔 (精神科医) ライフサイクルにおける精神的危機
小谷 英子 (大阪大) 人間存在の実存的課題

心とイメージ

(研究番号25)

●研究内容の概要

文字文化からイメージ文化への転換が言われて既に久しい。ひょっとすると、日本社会の急激な変質とともに、日本的イメージそのものの変容が生じつつあるのかもしれない。若者の間には、連綿と続いてきた伝統的なイメージをも、レトロの感覚で受容しようとする傾向さえ見られる。だが他方では、イメージの気質そのものにはさしたる変化はないのかもしれない。日本文化は古来、輸入文化を次々に受け入れ土着化してきたモザイク文化であり、日本こそ古くからポスト・モダンであったのだ、という説も、一部では唱えられている。何れにしても、現今の文化的変貌のかつてないスピードが、イメージ文化の新しい可能性を秘めつつ、同時に何よりも、現代人の「心」の統合性を脅かしているのも、紛れもない事実であろう。本研究チームは、昭和63年度に行った3回の準備会を踏まえて、「心」の統合性の問題を、その具体的な表現としての、身体・遊戯・箱庭・夢・神話・絵画・映像・詩・小説・メルヘン等々の「イメージ」から、総合的・学際的に考究していこうとするものである。

●研究の特色

「心」の問題を、単に理論的のみならず、実際に「心」が「イメージ」として表現された広い意味での「創作・作品」に則して考えていこうとする点に、本研究の最大の特色があると言えよう。いまひとつの特色は、この総合研究を通じて、「イメージ表現」に即した新しい授業内容と授業形態を模索していこうとする志向であろう。全国的レベルで見ても、相当に新しい研究・教育分野の開拓を目指している、と言えるのではないか。

●研究の必要性

広い意味での「創作・作品」(身体・遊戯・箱庭・夢・神話・絵画・映像・文学等々の「イメージ」表現)と理論的考究とを結びつけようとするれば、自ずと広い分野(本研究チームの場合は:美術、神話、文学、哲学、心理、医学、言語等々)の研究者の学際的協同が不可欠となる。

●研究チームと研究の分担

サスキア・石川フランケ (文) 音・色・文字・言葉とイメージ
上村くにこ (文) 東西の芸術的イメージの比較研究
後潟 雅生 (文) ドイツ・ロマン派と現代のメルヘン
谷口 文章 (文) 人間論の展開
○西田 英樹 (文) リルケにおける詩的形象
藤岡 喜愛 (文) 気功法における「意念」
松尾 恒子 (文) 心の成長過程とイメージ
森 茂起 (文) 宮沢賢治における「心象」
斧谷彌守一 (文) 言語とイメージ

環境と文化

(研究番号26)

●研究内容の概要

人の世界観および自然観、そしてそれらに基づく文化の様相は、人の生活する自然環境によって大きな影響を受けるものである。古代におけるほど、人の生活は自然の調和のとれた輪廻のシステムに組み込まれていた。

すなわち、古代における文化の様相と盛衰、すなわち文化の源流の様相は、気候や風土などの自然環境の諸条件に大きく支配されてきた。しかし、現代における科学技術文明の発展は極めて異常な様相を呈しており、エネルギー資源の涸渇や地球規模の環境汚染の増大などにより、21世紀初頭における人類の危機説さえ出ている現状である。

本研究の目的は、人文科学、社会科学および自然科学の諸分野の見解を総合して、文化の源流およびその発展の様相を環境科学的に考察し、現代のような人類の危機を招来した文化の要因を解明し、その研究結果に基づいて、人類永存の為の文化のあり方を考察しようとするものである。

●研究の特色

自然環境と文化の発展の様相の相関性について、総合科学的に考察する。そのために、自然科学、人文科学、社会科学の諸分野、すなわち気候学、地球化学、文化人類学、生物学、哲学、地理学、経済学などの諸見解を収集し、それに基づいて、人類文化史的に見た自然科学の発展の様相、および環境科学的に見た文化史の考察・研究などを行う。

●研究の必要性

環境と文化との相関性についての考察は、総合科学的な立場に立脚して、各方面より諸情報を収集する必要があり、総合研究は必須である。

●研究チームと研究の分担

- 藤岡 喜愛 (文) 環境観の進化史
- 高阪 薫 (文) 海洋文化の伝統
- 堀 直 (文) 乾燥地帯の歴史
- 久武 哲也 (文) 新大陸原住民の環境観
- 谷口 文章 (文) 人間の思想の展開－西洋及び東洋的の思惟方法－
- 日下 譲 (理) 水自然と文化
- 藤田 晃 (理) 気候と人類活動
- 田中 修 (理) 植物環境と人類の生活
- 高橋 哲雄 (経) ヨーロッパの辺境文化
- 柳田 侃 (経) インドの開発思想

お知らせ

◎第9回研究所公開講演会

東洋思想史学者 福永 光司 氏
1989年5月26日(金) 午後3時から 1012号講義室
演題「日本の神道学と中国の道教学」

◎研究所叢書の発行

叢書9「平生夙三郎の総合研究」 1989.3 発行
叢書11「視覚を探る」 1989.3 発行
叢書12「戦後日本の経済文化」 1989.3 発行
本書入用ご希望の方は、総合研究所にお申し出下さい。

◎人 事

日下譲(理学部教授)の所長任期満了に伴い、次期所長に柳田侃(経済学部教授)が就任した。